【授業公開】
学校教育実践コース（社会科教育），社会科研究演習
担当教員：矢澤　知行・森　貴子

史料から歴史を読む

社会科教育・森　貴子

2008 年 6 月 27 日（金曜日）4 時限目に行われた授業公開は、社会科研究演習を対象とした。当日の様子を報告する前にまず、授業の目的・内容・スケジュール等、概要を説明しておく。

1. 授業の概要

今年度前期の社会科研究演習は，二回生・三回生（合計 18 人）を対象に，上記タイトルにて開講された。

(1)授業の目的

歴史は，過去の事実の羅列ではない。それは，現在に生きる我々が，過去の史資料から構築したものである。本授業では，東洋・西洋の特に中世を対象に，一次史料を直接読解することを通じて，歴史の被構築性に気づくと同時に，その生成の現場に降りていくことで，豊かな歴史イメージを獲得することを目的とした。また，史料をとりまく社会的環境に目を向けることによって，適切な史料解釈を試みることが，他の社会科学分野での研究実践においても必須の作業であるとの認識につなげたいと考えた。

具体的な到達目標は、以下の通りである。

〇普段，教科書等の描写から知識として身につけている歴史像が，具体的にどのような史料から構築されているか，理解することができる。

〇史料生成の環境に注目することで，その性格・利用・伝来に目を向け，そこから史料内容の妥当な解釈をすることができる。

〇以上のようなテキストと社会的コンテクストの往復作業から，多義的な歴史像の可能性に気づくことができる。

(2)授業の詳細

＜内容＞

まず、担当教員が，東洋・西洋の中世を対象に，社会の様々な側面を特定の視点から描写した史料（日本語に訳されているもの）を取り上げた（各 5 史料）。

次に、学生が自ら選択した史料について，なぜ･誰によってその史料が作成されたのか，どのような内容を持っているのか，どのように機能したのか，などを調べて発表した。

発表の後、質疑応答を重ねることで、史資料に対する理解の深化を目指した（史資料を適切に読むということはどういうことなのか、どのような努力が要求されるのか)。

＜スケジュール＞

第一回：ガイダンス
第二回：史料の提示・説明／学生による選択
第三回：トゥルファン出土ウイグル字土地売買文書（11～13 世紀）
第四回：ロベール王に捧げる歌（1025 年頃フランス，三職分の観念）
第五回：河南省登封県少林寺聖旨碑（13～14 世紀，モンゴル帝国による宗教統治）
第六回：ドゥームズデイ・ブック（1086 年，ノルマン征服後のイングランド封建社会と所領構造）
第七回：東方見聞録（13 世紀末マルコ・ポーロ，日本の描写，東西交流）
第八回：サン・トメールの商人ギルド規約（1127 年，都市共同体と自治）
第九回：老乞大（15 世紀，高麗による中国語の会話教科書）
第十回：マグナ・カルタ（1215 年，イングランド封建王政）←←←←←【授業公開】
第十一回：大旅行記（三大陸周遊記）（14 世紀中葉イスラーム教徒旅行記，エジプトの描写）
第十二回：荘園裁判所記録（14 世紀初頭イングランド，領主＝農民関係，村落共同体）
第十三～十五回：総括―史料解釈の前提と新たな読みの可能性―

２．公開授業の詳細

６月 27 日は、マグナ・カルタを素材とした授業を公開することになった（上述のスケジュールで第十回目に当たる）。1215 年にイングランドのジョン王（フランス王との戦いに敗れ、大陸所領を喪失したことから失地王とも呼ばれる）は、国内貴族の反乱を収めるために彼らの要求を承諾し、マグナ・カルタとして発布した。この所謂大憲章が、イギリス立憲政治の基礎として高く評価され、注目を集めてきたことは、周知の通りである。

当日はまず、報告担当の学生二名（中川あゆみ、遠部裕一）によって、時代背景、現存するマグナ・カルタの形式（モノとしての特徴・材質・記述言語・保管様式）、概要（条文の内容構成＝①封建的慣習に関するもの、②国王の財政的搾取の制限、③裁判に関するもの、④王権の行政機能に関するもの、⑤諸侯以外の社会階層のための規定、⑥国王の過去の行為の取り消し・撤回を定めたもの、⑦保証条項）が説明された。

さらに報告者は、複数の条項を具体的に議論することを通じて、これが従来言われてきたような「イギリス人の自由の大憲章」といったものではなく、封建的慣習を国王に再認識させる役割を担っていたこと、それにもかかわらず、国王権力に対する制限を明文化していることなどから、後代になって（特に 17 世紀のイギリス革命期）、「法の支配」の源泉として重視され、その条項・文言が再解釈されることを通じて、自由の守護神的な意味を付与されることになったと指摘した。

以上の報告を踏まえて、全体で質疑応答を行った。そこでは、王権と貴族との関係のみならず、教会権力をも加えた中世社会の構造をめぐって、議論が交わされた。

３．授業後のカンファレンス

授業終了後すぐに、教員間で意見交換がなされた。カンファレンスへの出席者は、岡村茂教員、中西典子教員、川瀬久美子教員、授業担当者の四名であった。そこでは、以下のようなやり取りがなされた。

○ 中西典子教員：報告の内容・資料について、学生が大変よく準備していた
←授業担当者：学生の報告については、波はあるものの、回を重ねるごとに充実したものになっている。特に今回は、プロジェクターなども利用して、視覚的にアプローチしている点で評価できる。

○ 川瀬久美子教員：報告後の質疑応答の際、意見が出にくい場合は何か方策を考えるべきではないか（質問紙の利用など）
←授業担当者：議論合間の無言時間をいかに使うかは難しい問題。以前に学生から「担当教員二人が話し始めると質問し辛い」「考える時間が欲しい」などの要望が出されたため、無言状態を含めて、一定の時間は学生たちに任せるようにしている。

○ 岡村茂教員：マグナ・カルタという史料が生み出された社会背景については、より構造的に把握する必要があるのではないか
←授業担当者：確かに今回の報告では、時代背景は年表のように事件の羅列としてしか説明されておらず、物足りない。マグナ・カルタの作成要因やその性格・意義は、ジョン王による大陸所領の喪失（アングロ＝ノルマン王国の崩壊）と、これに起因する王権と貴族層との関係変化、都市民の成長など、イングランドの政治的・社会的・経済的動向をもっと考慮しなければ、深く理解することはむずかしい。授業担当者が質疑応答の際にこの点を強調し、討論につなげられなかったことは、反省しなくてはならない。

４．授業の達成度・今後の課題

最後に、15 回の授業全体に対するコメントを簡単に述べておきたい。一次史料を読むためには、いくつもの手筈が必要である。この授業を通じて学生たちには、史資料を理解するための準備の重要性と難しさを学んで欲しかった。同時に、史料から歴史を考えることの魅力を感じて欲しいとも願っていた。回を重ねるごとに、報告と討論との両面で内容に成長が見られたことから、結果として、所期の目標をある程度は達成できたように思う。授業担当者にとっては新しい試みであったが、討論のあり方を含めて改善を加えながら、今後も取り組みを続けていきたい。